

疑問文における「は」と「が」及び「nun」と「ga」

「 _____ ?」「郵便局がどこですか？」をめぐって

朴 序敬

はじめに

日本語の助詞「は」、「が」の問題に関してはこれまで様々な研究が行なわれてきたが、そこにはまだ議論の余地が多く残されている。日本語と韓国語は主題が助詞でマークされ得るという類似点を持っており、「は」と「が」が持つ統語的機能及び意味機能にも似た働きを持つ助詞が韓国語にも見られる。「は」と「が」のそれぞれに対応する韓国語助詞は「 / nun」、「 /가 ga」¹である(以下、便宜上「nun」、「ga」に表記することにする)。両言語の助詞には類似した働きが多いが、疑問文の主題位置に韓国語では「ga」が現れることがある。そこで、日本語と韓国語の主題化における相違を先行研究のいくつかの観点から検討する。また、その相違の原因についても考察を試みる。

1. 日本語と韓国語の疑問文で使われる助詞における相違

本稿では日本語と韓国語の疑問文を中心に主題化助詞の相違を考察する。

次の(1)は韓国語と日本語の物語文である。物語文はこのような流れをとることが多い。

(1)

가

¹ 韓国語の助詞は終音節により選択される。これらは音声上の問題であり、機能的違いはない。

「は」: 閉音節(子音) + 「 un」 「が」: 閉音節(子音) + 「 i」
開音節(母音) + 「 nun」 開音節(母音) + 「가 ga」

朴 序敬

가 , ' , .

昔々、その昔、ある所に小さな男の子がおりました。その子の体は大人の指先ほど。「いっすんぼうし」と呼ばれておりました。

ここでは、「が」には「ga」が、「は」には「nun」が対応している。両言語の物語文においての「が」、「ga」と「は」、「nun」は同じ働きをしているように見られる。このように、両言語の助詞の用法は極めて類似しているものの、常に全く同じ働きをするとは言えない。その一つが疑問詞疑問文である。

(2)

a. 郵便局はどこですか。

— ? (直訳: 郵便局がどこですか)
ucegug i eodiibnigga?

b. お名前は何ですか。

— ? (直訳: お名前が何ですか)
ireum i mueosibnigga?

c. これは何ですか。

— ? (直訳: これが何ですか)
igeos i mueosibnigga?

ここで対象とするのは主に述語に疑問詞を含む疑問文(疑問詞+連結詞の述語文)である。対象をこのように制約する理由は、両言語の相違が疑問詞疑問文、特に疑問詞が述部にある場合に顕著に表れるからである。本稿で扱う疑問詞疑問文を図式化すれば次のようになる。

[体言+助詞]+[疑問詞+連結詞+が]
{主部} {述部}

このような文の場合、日本語の疑問文では何故いつも主部に「は」が使われるのか、また韓国語の疑問文では何故主部に「ga」が使われる場合が生じるのか、この相違が見られる理由は何か、などに関して以下で考察したい。

韓国語の主題表示には主に「nun」が用いられるが、上記のようにある特定の発話環境においては「ga」が用いられるのが普通である。以下、疑問文に「ga」

が用いられるのを、「ga」による主題化であると想定し、韓国語の疑問詞疑問文において「ga」による主題化が起こる条件を探ることとする。

2. 日本語の疑問文における主題化

日本語の疑問文ではいつも主題化が起こる。これを説明できるいくつかの点を挙げ、その理由について論考する。

日本語では疑問詞が主格の位置に置かれる場合を除いて疑問詞疑問文における主語は必ず「は」でマークされる。特定の物事を題目とし、それを取り上げ、答えを述べるという文、つまり「Xは何/誰/どこ/いつですか」のような述部に不定の名詞、疑問(代)名詞を持つ文は典型的に「は」をとる文である。

名詞の中には「私、あなた、これ、それ」のように、談話の場でそこにある対象を指し、それを特定することを本来の役割とするものがあり、これらのある談話の冒頭に持ち出す時は通常「は」が使われる。「Xが」とすると、述語が陰題²になり、排他(総記)の意味を持つ文になる(井上1979、堀口1995)。

- (3) 私はタイから来た留学生です。 私がタイから来た留学生です。
 ここは学生の自習室です。 ここが学生の自習室です。

「誰/何/どちらが ~ですか」に対する答えとしての「太郎が~です」が「排他」の典型とされる。

以下、何故疑問文の主語が主題になれるかを説明するいくつかの見解について述べる。

2-1. 「は」の談話機能の観点

疑問文の機能は聞き手から反応を引き出すことであり、主として情報を得るのに使われる。従って話し手は聞き手がその情報を持っていると前提した上で会話が始められる(進められる)場合が多い。

² Xが~だ」のように述語が名詞句になる文、例えば、「君が主役だ」のような構文における主題を三上(1953)は「陰題」と呼んでいる。また、同構文の主題を野田(1996)は「暗示的主題」としている。

朴 序敬

田原・伊藤・朴(1985)は「は」の談話機能の観点から、「は」には既出名詞句を[旧情報提示]する働きと、初出名詞句を[旧情報化]する働きがあると述べ、「は」を用いる疑問文を解明している。発話のはじめからいきなり主題助詞が用いられるような、新旧情報の使い分けでは説明し得ない主題助詞の使い方が言語行動場面で行われていることから、田原・伊藤(1985)はこれを情報展開の要因に基づいた「は」の談話機能と見なしている。この「は」の談話機能には[旧情報提示]と[旧情報化]がある。[旧情報提示]とは、話し手が聞き手に旧情報を提示することにより再確認したいという動機が発話意図として現れたとき、主題助詞の使用が起こることをいう。一方、[旧情報化]とは、聞き手との間に共有されていない情報を、話し手が旧情報とみなして題目化して提示することである。この場合、旧情報を表す助詞「は」を省略することはできない。また、話し手が聞き手に対し、あるテーマに注意を向けたり、ある題目に引き込んだり、話題の内容を転換したいという動機を抱いたとき旧情報化に基づいて主題化が起こると田原・伊藤(1985)は説明している。

「名古屋駅はどこですか」のような、唐突な問いかけ文における主題化も、この観点から説明できると思われる。田原・伊藤・朴(1985)は韓国語の助詞「nun」もこのような機能を持っていると述べている。

2-2 . 疑問文の状態性

大門(1993)は、文を状態性の観点から、出来事(あるいは動作)を表す「出来事疑問文」と状態を表す「状態疑問文」の2つに分けている。出来事を表す疑問文は先行文脈なしで用いられ得るのに対して状態疑問文の場合は先行文脈なしで物事の状態を問うことは出来ない。

(4)

どうしましたか?

誰がどうしましたか?

何がどうなりましたか?

これらはいずれも出来事についての問いかけの疑問文である。しかし、状態文

は談話内の話題が省略された文(5a)としては可能であるが、先行文脈から独立した形として物事の状態を問うことはできない。

- (5) a. (太郎は) どうですか。
b. * 誰がどういう状態ですか。
c. * 何がどうですか。

このような文の非文法性は、状態疑問文における先行文脈の有無と結び付けて論じられているが、これは日本語の疑問文における常に主題化される理由の一つを示していると考えられる。

2-3 . 話者と聞き手の関係の観点

先行文脈なしにある名詞が助詞「は」を伴い、発話時点で既に主題として現れる要因は、話者と聞き手の関係と深く関わりを持つと見られる。まず、話者と聞き手の関係について見てみる。

話の場への依存性が高く、話者と聞き手との間に何らかの密接な関係がある場合、主題化が起こりやすくなる。つまり、話者と聞き手の間に共通する知識や経験、もの、人など共有知識が多ければ多いほど、また同じ集団の構成員同士であれば更にその名詞句は主題化されやすいと考えられる。

- (6) 子供はもう寝たか。
社長は3時に帰ります。

前後の文脈もなく、このような会話だけでもお互いに了解できるのは、会話が行われる場や話者と聞き手の間に深い関係があるからであろう。

話者と聞き手との間に共通の知識がどのくらいあるかという「共通する知識の量的度合」も主題化の頻度と関係すると言える。何らかの共通する部分があれば、その情報が主題化に繋がりやすくなるからである。これに対して街で偶然すれ違った人への質問や初対面という状況における、お互いに共通する部分の少ない人同士の会話は場への依存性が強い。

以上、日本語の疑問文の主題化に関して、日本語の疑問詞疑問文の主語がなぜ主題化されるかの理由について概観した。次に、韓国語にこれらの原理を適用し

次に、日本語の疑問文の状態性から「? (*郵便局がどこですか)」の非文法性を説明できるかを検討してみる。状態疑問詞である「どうだ」は韓国語の「」であり、これを疑問文にすると「? (?) (直訳:お味がどうですか)」になる。日本語の場合は「お味はどうですか」になる。つまり、韓国語では状態性を表していても「nun」にならず「ga」助詞を用いることができる。従って、疑問文の状態性から韓国語の「? (*郵便局がどこですか)」の非文法性を説明できるとは考えにくい。

話者と聞き手との関係からは話者と聞き手との間に何らかの密接な関係がある場合、先行文脈に登場してない名詞句でも主題化されやすいことは韓国語でも同様であると考えられる。上記の例(6)は韓国語でも常に主題助詞「nun」になる。

- (9) ? 子供はもう寝たか。
 3 . 社長は3時に帰ります。

談話は両者の間の共有知識によって進行され、その主題名詞句は助詞「nun」で表す。

3-1 . 「ga」疑問文の主題化の検証

3-1-1 . 「ga」を伴った疑問詞疑問文

以上述べたことを考慮しながら、「ga」疑問文の詳しい分析検討を試みる。その際、「述部に疑問詞を含んだ文」のみを考察対象とする。以下の疑問文は述語に疑問詞を含む文であり、「ga」が用いられ得る文である。(日本語は直訳である。)

- (10) ?
更衣室がどこですか。
 ?
地下鉄駅がどちらですか。
() 가 ?
(地図を見ながら) 現在の位置がどこですか。

朴 序敬

しかし、次のような場合は「nun」の方が自然である。

(11)

?

この建物は何ですか。

?

その観光コースはいくらですか。

疑問文は、想定できる答えの違いによって「Yes-No 疑問文」と「疑問詞疑問文」があり、さらに「ga」が選ばれるか「nun」が選ばれるかは質問への情報提供可能性という点とも関係する可能性がある。つまり、「これは何ですか」や「名古屋駅はどこですか」のような質問文は常に「現場性」を持つと見られるのに対し、「お宅はどこですか」や「名前は何かですか」、「これはどうですか」のような質問文は「現場性」を持つとは思われない。疑問詞疑問文の場合は情報の「+現場性」、「-現場性」が関係し、それによってさらに主題化の種類が決まるのではないと思われる。即ち、日本語の「は」を使う疑問文に対し、韓国語は「ga」を使い、中には「ga」と「nun」の両方を許容するものが存在するのは「現場性」と関係があるのではないと思われる。「? (これが何ですか、あれが何ですか)」のように話し手が疑問文を用いる際に他の項目との対比意識を抱いていない場合や、また「(一方)～は」のような話題取りたての意味合いがないかぎり「ga」助詞を用いた疑問文が現れる傾向にあるようにも思われる。³しかし、この記述のみでは十分でないことは確かである。

以下では疑問文を「ga」の「現場性」と「取り立て性」、そして「情報構造」の視点から見ることにする。

³ しかし、「ga」か「nun」かの選択に関しては韓国語の native speaker の間でも一致が見られないこともある。

3-1-2 . 現場性による主題化 - 「ga」主題化の仮説

「現場性」ということばを初めて使ったのはSin, C. S. (1975)である。Sinは助詞「ga」の疑問文への表れについて「ga」は話の場への依存性が高いもので、これを助詞「ga」の現場性という用語で説明する。Sinは、純粋な格表示としては無表示であり、「指定」の意味を表す時に「ga」を添加するという意味機能説を主張した。Sinは特に談話の出発点として文頭に用いられる「ga」を「主題表示」と見なしている。このとき、「ga」は状態的状况の「-現場性」の意味をもち、動的な状況では「+現場性」の意味合いを持つと指摘している。通常は「nun」が主題表示の機能を担うが、談話の出発点として文頭に使われる「ga」が「+現場性」「+現在性」の意味を持つ時には「nun」の主題機能を「ga」が代わりに担うとしている。

助詞「ga」は「現在」という時相と関わりを持つ助詞と見られ、このことから現場性を持つと見られる。

Lee, K.H. (1993)も、談話の出発点として文頭に置かれる「ga」の意味機能によって「ga」の機能を「主題」として解釈できる場合があると述べている。Lee (1993)は、「+現場性」の意味機能について、「ある事件が起きて進行中であるか、またはその結果が持続している様相を表し、談話上ではこのような状況を聞き手に知らせる機能を持つ」と述べている。

現場で知覚した内容を発話する。つまり話し手が目撃してすぐ発話した内容であれば、その発話は「+現場性」の意味を持つ。また話し手と聞き手が同時に目撃した状況での発話であればその場面から「+現場性」の意味付与が可能になる。

「恒常的な状況」と「今」という時間的対比から現れるように状態的状况は「-現場性」の意味を持ち、動的状況は「+現場性」を持つ。

韓国語の主題を表示するのは「nun」の機能である。ただし、談話の出発点として文頭に置かれる「ga」が「+現場性」の意味性質を持つ場合にはその「nun」の主題機能を「ga」が代行すると見られる。

(12)

郵便局が 火が ついた。(郵便局が燃えている。)

가

ヨンヒ가 手首가 折れた。

疑問文における「は」と「が」及び「nun」と「ga」

恐れ入りますが、リー先生のお宅の電話番号が何番ですか。(直訳)

B: . 765 4312 .

ちょっとお待ち下さい。765の4312です。

A: .

どうも、ありがとうございました。

談話例(2)

A: .

今度の土曜日の晩に私たち演劇の公演をします。時間があれば来て下さい。

B: _____ ? (14)

今度の土曜日が何日ですか。(直訳)

A: 11 .

11日です。

B: _____ ?

公演は何時から始まりますか。

A: 6 .

午後6時からです。

上の(1)と(2)の例文はいきなり人に尋ねている文であり、取りたて性がないため「ga」が用いられていると解釈できる。

談話例(3)

A: _____ ? . (15)

これが何ですか。高そうに見えますが。

B: .

母へのプレゼントです。今日誕生日なんです。

A: _____ ? (16)

あれは何ですか。

B: .

あれもプレゼントです。

疑問文における「は」と「が」及び「nun」と「ga」

A: .
それがいいですね。

談話例(6)

A: , ?
林君、明日暇?

B: , 가 . ?
うん、明日はバイトもないし、暇だよ。どうして。

A: 가 ?
パーティーに行かない。

B: . 가 ? (20)
いいとも。場所がどこなの。(直訳)

今まで考察してきた主題化の論理から上記の談話例一般における主題化の検証を試みる。

日本語の「人参茶はどうか」、「伝統人形はどうか」、「場所はどこの」という主題化に関しては、次のように言える。

「前の文脈と関係のある名詞句は主題に成り得る」という条件に合致しているため主題化されたと思われる。

状態疑問文は先行文脈なしでは成立できず、いつも主題化される。

話者と聞き手の間に既にリストにあがっている「既知」情報であるため主題になり得る。

以上の三つの解釈が可能である。しかし「人参茶」、「伝統人形」は、聞き手にとっては初めて登場した「新情報」であるのに、主題になっている。「伝統人形」も「人参茶」も既知情報である。即ち、指示対象が話し手と聞き手との間で一致しているから主題化が可能であると考えられる。これは、 の条件に当てはまる。

の条件からの主題化と見なす場合、「人参茶」、「場所」はそれぞれ「お土産」と「時間」との関係から説明できるが、突然の「郵便局はどこですか」という質問の主題化においては同様の説明ができなくなる。「郵便局」は「前の文脈と関係の

朴 序敬

ある名詞句は主題に成り得る」という条件を満たしていないからである。 の状態性からの主題化と見なす場合は、「人参茶」がうまく説明できる。 も日本語の「は」の説明には利用できる。しかし、韓国語の場合は少し事情が異なる。それは談話例の日本語訳（直訳）を見れば分かる。しかしながら例えば（19）の「
（伝統人形が）」の部分が「
が（人参茶が）」に対する対照項目としてならば「nun」を用いて「
（伝統人形は）」と言ってもいい。また、談話（6）の場合は「
が（場所が）」を「
（場所は）」に置きかえると「時間」に対する「場所」という対照的意味合いを持つ文となる。

4. 「が」を主格に持つ疑問文と主題化

それならば、日本語の場合「が」を用いる疑問文はいつ使われるのか。久野は、述部が新しい情報を表す「主語＋が」文は文全体が新しい予測できない出来事を表すと述べている。例えば、

- (21) おや、太郎君が来た。
おや、雨が降っている。

何かの存在・出現を表す文は、新しい、予測できない出来事を会話に導入するもっとも自然な方法であり、会話の初頭に「主語＋が」が多く現れることも誰（何）かの存在、あるいは誰かの出現を表す文であるためだと説明している。

「が」を用いる叙述文は新しい予測できない情報を会話の初頭に導入するのに自然な方法であるのは韓国語においても同様であろう。では、「が」を用いる疑問文においてはどうか。

久野はさらに「主語＋が」文を次のように疑問形にし、その特徴について指摘している。

- (22) a. 太郎が来ました。
? 太郎が来ましたか。
b. 太郎の手紙が届きました。
? 太郎の手紙が届きましたか。

上記の文は、相手が言ったことを確認する文としては自然な文である。そのような文脈なしでの中立的な質問としては許容できないようである。この理由として久野は、「質問というのは通常何かについての質問であって、全く予測できない新しい出来事の実偽を問う質問をしなければならないシチュエーションは余りないからである」と説明している。

上記の文をそれぞれ韓国語に対応させると、次のようになる。

- (23) a. 가 . 太郎が来ました。
가 ? 太郎が来ましたか？
b. 가 . 太郎の手紙が到着しました。
가 ? 太郎の手紙が到着しましたか？

何れも韓国語においては自然な文として成り立つ。

日本語において主格疑問詞には必ず「が」が付加される。これは文中の疑問詞の位置や情報構造と関係すると思われる。

- (24) a. 誰がいますか。
b. 何がありますか。
c. どこが郵便局ですか。

この中でcは自然な質問とは言えない。何故不自然さを感じるのであろうか。「どこが郵便局ですか」が成立すると思われる場面を想定してみる。

話し手が既に別の人からこの辺に郵便局があるということを聞いたが、まだ見つからないという条件の下で発するとき

「すみません。道を聞きたいのですが、この辺に郵便局があると聞きましたが、どこが郵便局ですか。」

郵便局に対する情報を得たあとで、それを再確認する場面するとき

「あそこが郵便局だよ。」 「えっ？どこが郵便局ですか。」

、 の条件の下であれば「どこが郵便局ですか」は決して不自然ではない。二つの条件の共通点は先行文脈があることである。

次に上記の文 a、b、c を主題文に替えてみることにする。

上例のように「ga」は格を表すのみならず、他の格助詞に後接され得る。「-가 hago-ga (とが)」、「-가 ege-ga (にが)」がその例である。「ga」が「nun」のように格助詞に後行するということから考えると、「ga」が格助詞以外の機能を表しているともみることができる (Seong 1977、Im 1972)。また「ga」は意図性を持たない否定文において日本語の「は」のように用言の間への割り込みが可能である。Seong は「ga」の挿入によって排他的対立を示し、「ga」の先行成分に話者の関心とともにその成分を浮き彫りにさせる機能があると記述し、この機能は「強化 (reinforcement)」、または否定の強調表現 (negative pre-emphasis) とみなされている (Choi 1991)。実際「ga」の有る文と無い文を比較した場合、「ga」の有無によるニュアンスの差がないとは言えない。

以上のように「ga」は他の格助詞に後接できるという日本語の助詞「が」にはない統語的機能がある。

以上、「ga」の主題機能について見てきたが、このような様々な観点からの研究があるにも拘わらず、「ga」の主題化はまだ仮説的な段階にあるというのが現状であり、その機能自体を認めない意見も存在する。これまで見てきたことから「ga」による主題化を全て説明できたわけではない。しかしながら、これまでの概観を通して、少なくとも格助詞としての観点からのみでは説明できない「ga」が存在することが明らかになった。

5 . 疑問詞疑問文における情報構造

5-1 . 韓国語の旧情報と既知

(27)

野球とサッカーのうち、どちらが面白いですか。(疑問詞が主語の場合)

?

何がありますか。(疑問詞が主語の場合)

?

ここはどこですか。(疑問詞が述語の中にある場合)

가 ?

朴 序敬

平叙文における「は」と「が」の使い分けは両言語間で一致することが多いし、また、疑問文であっても疑問詞が主語になる場合も相違は見られない。しかし、上例から分かるように述部に疑問詞を含んだ疑問文の場合だけは全く異なる。少なくとも韓国語の疑問詞疑問文の場合、「既知」には「nun」、「未知」には「ga」を用いるという情報理論では説明不可能である。そこで韓国語の疑問詞疑問文における主題化と情報構造を考察することにする。

5-2 . 情報理論

「は」と「が」の使い分けの際によく議論されるこの情報理論はアメリカの言語学者ウォレス・チェイフ (Chafe 1971) の old information、new information に関する論から始まっている。情報理論の一般原理として、文は旧情報から新情報へ進むという点があげられる。この原理は文頭を旧情報の、文末は新情報の位置とし、文末に近づくにつれて新しい情報が現れるというものである。

「新情報と旧情報の原理」によると、知られていない新情報を表す主格名詞には「が」が付き、既に知られている旧情報には「は」が付く (野田1996、井上1979)。このように情報は旧から新へ流れるのが一般的であると言えよう。

「は」と「が」の情報構造を論じる前に上で述べた旧情報と新情報、また、以下で出現する「既知・未知」の概念について触れておく。

5-3 . 旧情報と既知概念の定義

本節では、先行研究における新旧情報の定義を概観する。

新旧情報に関してこれまでに様々な定義が試みられてきたが、その中で「は」と「が」の使い分けの要因として登場したのが「既知情報」、「未知情報」という概念である。まず、既知と未知、旧情報と新情報に関する用語の概念を考察してみる。

Chafe (1976) は new information と given information の定義で given information とは、発話の時点で聞き手の意識に存在していると仮定される知識のことであるとした。久野 (1982) は先行文脈から復元可能なインフォメーションを旧情報と規定している。

井上(1979)は、どのような立場に立って発話するかという話者の視点から新旧情報を捉えている。つまり話者の視点によって新旧の判断が行われ、聞き手が分かっているものと判断された情報は旧とし、話者が聞き手に伝えようとする、聞き手にまだ知られてないと判断される情報を新とするものである。さらに、井上は「既知=旧情報=主題」とのように同一線上の概念で捉えている。しかし、既知と旧情報が必ずしも一致しないことも指摘されている。

尾上(1995)は主題を、解説部分(=伝達主要部分)に対して前提となるべき位置に立つ先行成分のことであると定義し、主題であることと既知、既出であることは必ずしも一致しないと述べている。即ち、主題であることが直ちに文脈上既知であることを意味するのではない。

他に、堀口(1995)は、単に「は」は既知であり、「が」は未知であるということから様々な誤解が生じたと指摘する。既知と未知という語は本来の「は」、「が」の説明とは無関係であることを、物語の例をあげて示している。

- (28) むかしむかし、ある所におじいさんとおばあさんが住んでいました。
ある日、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。

初めの文の「おじいさん」、「おばあさん」に「が」が付くのは、それが未知のものだからではなく、「不定称」⁴としての「おじいさん」、「おばあさん」を表すからであり、その時「が」が用いられる。これに対して第二文はそれぞれ特定の「おじいさん」、「おばあさん」を表している「限定称」であるため、「は」が用いられるのである。「不定称」から「限定称」に変わることにより、話の展開途中でこの「おじいさん」、「おばあさん」は「は」で表されても「が」又は「を」、「に」などで表されても、物語の終わりまですべてがその「限定称」としての「おじいさん」、「おばあさん」になるのである。こういう意味から既知と「は」、「が」の使用を別の問題として扱っている。井上(1979)も、「は」と「が」の使い分けの決

⁴ 堀口和吉『「～は～」のはなし』ひつじ 1995

堀口は主題となる名詞句を次のように現わしている。p33

定称	総称 (表しうるもののすべてを指すもの)
	限定称 (表しうるものの中である個物のみを指すもの)
	特定称 (もともと特定の個物のみを指すもの)
不定称	(表しうるものの範囲を定めなくて漠然と指すもの)

朴 序敬

定的な要因の一つとして名詞がある特定の対象を指すのか、その指示対象を特定しない「不特定」であるかという点を挙げている。

以上「既知」に関しては、文の既出項目として、文中での既出とは関係なく既知っているか否かによるもの、また、一文の中での解説部分と前提部分の対照的な情報価値とみるなど多くのいろいろな観点が見られる。

日本語において疑問詞を述部に持つ疑問文の主語は必ず主題である。またその主題は一文中で述部より古い情報であることから、疑問文での「は」の付く名詞句の場合は常に「主題 = 既知 = 旧情報」の等式関係が成立する。

これまで考察してきたことから、日本語のおける主題 - 解説、既知 - 未知、旧情報 - 新情報の関係は以下のように整理することができよう。

既知項目であるということは指示対象が話し手と聞き手の間で一致しているということである。

新情報というのは当該の談話の中で初めて現れた情報である。

主題は既知項目である。しかし、既知項目が常に主題になり得るわけではない。

新情報であっても、それが既知項目であれば主題になり得る。

最後に、どのようなものが既知になるかに関する疑問が残る。これは、話者と聞き手の共有領域であると考えられる。つまり、[話者 A 聞き手 B] である。共有領域の中に有る要素は既知であり、この要素は主題化されやすい。従って共有する範囲が広いほど主題化された文が作り易いと考えられる。さらに詳しくは次章で述べることにする。

5-4 . 主題になり得る成分

ここでは、ある名詞を談話の初頭で「～は」と言う場合、それが何故「既知」と言えるかについて考察する。果して「は」で示された名詞項は全て既知情報として捉えられるのか、捉えられるのならどこまでを既知情報と見なすことができるのだろうか。既に述べたように「既知」は必ずしも「は」で表されるわけではない。しかし「主題」は必ず既知情報でなければならないため既知情報になりうる成分を調べる必要がある。既知の概念はよく主題と結び付けて考えられる。それ

では、どのような名詞句が主題になりうるだろうか。

柴谷(1978)は、どのようなものが「既知」と考えられるかは伝達上の問題であるとし、既知と捉えられるのは次の3種類であると述べている(p.213)。

- (1) 会話の場にあつて、会話の参加者が間違いなく見極められるもの。
- (2) 会話の場に(a)直接的に、及び(b)間接的に既に紹介されているもの。
- (3) 普遍的なもので、指示対象が一つしかないもの。

(1)のケースは普通、「こ・そ・あ」といった指示語を伴って主題化される。(2)の(a)のケースは、昔話などでまず登場人物を紹介し、それ以後にそれを主題化する場合である(紹介「が」 主題化「は」)。(b)のケースは、あるものの紹介によりそれに付随したものまでを含めて主題化される場合である。

また、野田(1996:121)で、既知と捉えられた成分は次のようなものである。

- (1) 疑問語
- (2) 話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞
- (3) 話の現場や前の文脈と関係のある名詞
- (4) いつでも聞き手の意識の中にある名詞

(2)と(3)は、「私」や「あなた」、「これ」、「それ」のような名詞がその典型的なものである。(4)の場合は、例えば、新聞の中で使われる「気象庁」や、料理のレシピのような表現法である。このような名詞は読者の意識の中にいつも存在するように扱われているのである。また、主格名詞と述語との結びつきに意外性がある場合を除いて、主題を持つ文になりやすい。

(29) 気象庁は七日、阪神大震災の現地調査結果を発表した。

(1)の「疑問語」も(2)の「話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞」も主題を持つ文に現れる点は同じであるが、「疑問語」は主題にはならず、その述部が主題になるのに対して「話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞」は主題になる事が多いという点が対照的であると野田は指摘している。

また、野田は日本語で文の主題になりやすいものに、格成分、中でも主格、話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞句やそれと関係のある名詞をあげて

化されえない対象としては、疑問詞と不定詞、話者にまだ知られてない対象がある。述語が「 (いる)」の場合、一時的存在、状態を表す表現、補語の機能を持つ体言、埋め込み文の主語が挙げられる。

また、それぞれを柴谷に対応させてみると、Seoの(1)は柴谷の(3)に、Seoの(2)と(3)は柴谷の(1)に、Seoの(4)は柴谷の(2)に該当すると思われる。しかしながら、Seoが言う限定性を持つ体言というものと柴谷が「既知」と考えているものが一致するかどうかは明らかではないので、さらに検討が必要である(Seoは「既知」という言葉は使っていない)。

また、寺村(1991: p.51)は、主題化に必要な条件の一つとして「初出の名詞句が特定の対象を指示する場合」をあげ、以下のように述べている。

一つの談話の最初の文で、話し手が自分自身について何か言うか、或いはその他、聞き手について何か尋ねるか、あるいは聞き手の視野にあるものを指し、それについて何か言うか尋ねるかする時は、その対象を主題として取りたて『Xは』で文を始めるのが普通である。平叙文であれば、『Xは』に続く叙述は、聞き手にとって新しい情報であり、疑問文であればそれは話し手が聞き手から得たい情報であるのが普通である。

主題化に必要な条件を満たす名詞句として寺村が挙げたのは、1・2人称の代名詞と一般的な集合を指す名詞句(汎称的、または全称的命題文の主格)である。この二つは聞き手にとって新しい情報になりにくいという点で関連している。

また、久野は主題化され得る成分として「現在の会話登場人物・事物リスト登録済みのものを指す名詞句」をあげている。「指示対象が一義的に決まっている事物、例えば、the sun、the moon、my wife、my childrenなどは常にこのようリストに書き込まれていて、会話のたびに新しくリストに加える必要はない」と述べている。

以上から、既知と考えられるものの特徴が主題になりやすい成分のものと類似した特徴を持つことは明らかである。その他、村田(1997)では「一般情報と個別情報」、大野(1987)では「既知扱い情報・未知扱い情報」などの用語も用いられている。

まとめ

以上、韓国語の助詞「ga」に格助詞以上の機能があり、疑問文においては「ga」に主題提示の機能があると想定して述べてきた。そして日本語の疑問文において主題化が起こる理由と見られるいくつかの観点と情報構造の観点を韓国語の「ga」を用いる疑問文へ適用することを試みた。しかし、そのためにはまず「主題」というものをもう少し詳しく見る必要があった。その結果、「情報の旧・新」、「既知・未知」、「話題・解釈」の関係は次のように整理することができる。

- (1) 知項目であることは指示対象が話し手と聞き手の間で一致しているということである。
- (2) 新情報というのは当該の談話の中で初めて現れた情報である。
- (3) 主題は既知項目である。しかし、既知項目が常に主題になりうるわけではない。
- (4) 新情報であっても、それが既知項目であれば主題になりうる。

これに基づけば、主題には省略できるものとできないものがあることになる。

主題は既知項目であるが、それは必ずしも旧情報であることを意味しない。初出の主題は既知項目ではあるが新情報なので原則として省略できない。そこで次のような仮説を立てることができる。

「主格であって、かつ省略できない主題は韓国語では「ga」で表し得る。或いは「ga」で表す傾向にある。」

() ? (あなたは)どこへ行きますか。

(主題部分の省略可能、韓国語では「nun」で表す。)

() . (私は)東京へ行きます。

(主題部分の省略可能、韓国語では「nun」で表す。)

? お宅がどこですか。(直訳)

(主題部分の省略不可能、韓国語では「ga」で表し得る。)

? お名前が何ですか。(直訳)

(主題部分の省略不可能、韓国語では「ga」で表し得る。)

朴 序敬

ここでも「お宅」という語そのものは初出であり、省略することはできないが、「nun」が使われている。これは、初出ではあっても、既に前文において既出が暗示され、既出事項の扱いを受けているからであろう。従って、上述の仮説に次の項目を付け加える必要がある。

「ただし、主語が初出ではあっても（従って省略はできないが）既出の扱いを受けている場合は「nun」が使われる傾向にある。」

これまでの考察を総合すると結論は次のようになる。

- 〔1〕 指定詞を使った疑問詞疑問文で、疑問詞が述語に含まれている場合、韓国語においても（日本語と同様）主語は主題化される。
- 〔2〕 主語としての主格が初出である場合（即ち既知項目ではあっても新情報である場合）や初出として扱われる場合、それは「ga」によって主題化される。
- 〔3〕 主語としての主格が初出であっても、既出項目として扱われる場合及び他との対照を表す場合は「nun」が使われる。

なお、上の例文において、述語に「～ [ibnigga] (～ですか)」ではなく「～ [indeyo] (～なのですか)」が使われていることに注目していただきたい。

(例) 通勤に一時間以上かかるということですが、お宅はどこですか。

, ?

「～ (～ indeyo)」は指定詞「 (ida)」の部分が連体形になったものであり、日本語の「～のですか」に相当する。このように何らかの前提がある場合、述語には「～」ではなく「～」が使われる。

「～のですか」に関しては小坂(1992 :pp. 219-241)に次のような記述がある。

- (1) 「～のですか」は疑問詞のない疑問文、すなわちYes-No 疑問文の場合は「質問者が命題内容をすでに与えられたものとして想定ないしは前提して、その想定ないしは前提された命題が正しいかどうかを(ときには疑いを持って)

問う」場合に使われる。

- (2) 疑問詞疑問文の場合は「疑問詞以外の部分は常に、与えられた内容として前提ないしは想定されている」ので、多くの場合に「～のですか」を使うことができる。

上述の「 (お宅はどこなのですか)」の場合、「相手の家がかなり遠いところにある」という想定ないしは前提がすでになさされていて、質問に際してはその想定ないしは前提された内容が既知項目として扱われている。だから、主題表示に「nun」が使われると共に、述語には「 (～indeyo)」の方が選択されている、と解釈できよう。

この場合、述語に「 (～ibnigga)」を使えば、主題助詞として「ga」を使う方が自然になる。

- (例) 通勤に一時間以上かかるということですが、 ? (お宅がどこですか)

この場合はある種の前提・想定があるにもかかわらず、述語に「 (～ibnigga)」を使うことにより、そのような前提抜きの中立的な質問をしている感を与える。

日本語の場合も同じ様なニュアンスの差はあるが、どちらの述語を使っても、助詞の変更はない。

- (例) 通勤に一時間かかるということですが、お宅はどこですか。
通勤に一時間かかるということですが、お宅はどこなんですか (どこなのですか)。

このように、例えば「主題化」の問題を論じる場合にも、その当該部分のみを詳しく検討するだけでは不十分であり、述語の形式や意味構造まで含めて考察する必要があると言える。ある部分を変更すればそれに呼応して他の部分も変わることが多いからである。

本稿では述語の体言化の問題にまで深く入り込むことはできなかったが、これは別稿に譲りたい。

朴 序敬

参考文献

- 市川保子 1988. 「取り立て助詞『八』の誤用 - 談話レベルの誤用を中心に - 」
『日本語教育』67 日本語教育学会
- 井上和子 1979. 「旧い情報・新しい情報」『言語』10月号 大修館書店
- 大門正幸 1993. 「『総記』の解釈について」『日本語教育』80
- 大野晋(編) 1987. 『日本語の本性』現代のエスプリ 至文堂
- 尾上圭介 1995. 「『は』の意味分化の論理 - 題目提示と対比」『言語』11月
号 大修館書店
- 神尾昭雄 1990. 『情報のなわ張り理論 - 言語の機能的分析』大修館書店
- 久野 1973. 『日本文法研究』大修館書店
1977. 「日本語の主題の特殊性」『言語』6月号 大修館書店
1978. 『談話の文法』大修館書店
- 小坂光一 1992. 『応用言語科学としての日独語対照研究』同学社
- 柴谷方良 1978. 『日本語の分析 - 生成文法の方法 - 』大修館書店
- 田窪行則 1990. 「対話における知識管理について - 対話モデルから見た日本語の特性」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂
- 伊藤武彦・田原俊司・朴媛淑. 1993. 『文の理解にはたす助詞の働き - 日本語と韓国語を中心に - 』風間書房
- 寺村秀夫 1991. 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 野田尚史 1996. 『新日本文法選書はとが』くろしお出版
- 堀口和吉 1995. 『「～は～」のはなし』ひつじ書房
- 三上 章 1960. 『象は鼻が長い』くろしお出版
1963. 『日本語の論理 - ハとガ - 』くろしお出版
1963. 『日本語の構文』くろしお出版
- 村田美穂子 1997. 『助詞「は」のすべて』至文堂
- Chafe, Wallace. L. 1976. "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics and point of View" In Charles N. Li (ed.) Subject and Topic, Academic Press

疑問文における「は」と「が」及び「nun」と「ga」

- Choi, S. J. 1991 . “Negative Pre-Emphasis”, Harvard Studis in Korean Linguistics 4
The Internationnal Circle of Korean Linguistics(
)
- Seo, J.S.[] 1996. 『 』
1990 . 『 』 2 』
- Che, W.[] 1976 . 「 < > 」 『 』 4
- Seong, K.S.[] 1977 . 「 」 博士学位論文
- Sin, C.S.[] 1975 . 「 」 『 』 67
1975 . 「 」 『 』 2
- Lee, K.H.[] 1993 . 「 < > 」 論文
- Im, H.B.[] 1972 . 「 」 『 』 28

